73回展　受賞者の声

守屋 紀代子
（岡田節子賞）

藥の辺り
130F

自宅の裏庭にひっそり咲いて名前も知らない花ですが、自分なりに存在感を見せて明るく生き生きと咲いています。その花の生命力を表現したいと思って描いています。動きも二通りになる様構成しました。又蓁の辺りに焦点を絞り心を込めて表現しました。この度の受賞ありがとうございました。今後共精進、努力いたします。

梁田 みい子
（原光子賞）新委員

浸食・再編　みえないもの3
130F

東日本大震災を経験し浸食されてゆく大きな力に衝撃を受け、その後、時の流れ、自然の力、人の力が影響し合い新たなものが生み出される力強さに感動しました。そんな中で見えていないものに気づき、自分の心の動きを画面と対話しながら制作してきました。委員推挙を頂き、大変嬉しく身の引き締まる思いです。この感激を制作を通してお伝えできればと思っております。

岡崎 好江
（東京新聞賞）

ナチュラルライフ
100S

女流展が終了し、暑い夏を何も考えずに済むキャンバス制作に取り掛かり奮闘します。6～7回程の下地を重ね、面布を眺めつつ、アーアー…どうしようと溜息の連続。ジィーと見ながら、〇を描く、もう少し大きく〇を描く。画面が動く。何となく行けそうと少しワクワク感。何とも計画性の無い稚拙な発想。いつもこんな感じで始まります。

香山 えみ
（会員賞）新委員

生命'18-Ⅰ
100S

私の「生命」という作品は心の中から湧き上がる感情を画面に込めた画です。ポリカプラダンという透明な基底板に裏から描き、無意識が命ずるままに自身を委ねて筆を滑らせます。裏から光を照らし映し出された美しさを表現した作品になっています。

白藤 さえ子
（会員賞）

希望と絶望の、果実
100S

母、美術家、フルタイム勤務という三足の草鞋を履いています。「育児や家事は女性がやって当然」という無言の圧力を打破するべく筆を取っています。1日の制作時間は1時間から2時間。限られた時間でより凄い作品を生み出すべく日々奮闘しています。マイペースでの発表になりますが、今後ともどうぞ宜しくお願いします。

中村 裕子
（大村文子記念賞）

静寂
100F

このたびは身に余る賞を頂戴し驚きとともに大変恐縮致しております。未熟でただただ必死に描いているといった状態ですが、モチーフ一つ一つと真摯に向きあい、描いていきたいと思っております。そして今回の受賞を励みにこれからも精進してまいります。

山岡 貞子
（マツダB賞）新会員

約束Ⅰ　2019
130F

今回、受賞そして会員推挙の連絡を旅先の船上で知り大変感激致しました。この時の気持ちを忘れずに、また励みとして、これからも絵と向き合っていきたいと思います。職場の4階から飽きもせずに眺めていた交差点が絵のモチーフの始まりです。すり減った白線、行き交う様々な人々、乗り物、動物、etc…　。そこから、人が消え、色が消え、心象風景に変化しました。これからも少しづつ絵が進化していけたらと思います。

田中 いく子
（トークロ・東美賞）新会員

私宙
130F

この度は受賞させていただき嬉しい年となりました。ご指導・応援をして下さる先生方のお陰と感謝しております。空を見上げると宇宙の壮大でミステリアスな世界を感じます。同じ空間に住んでいる私達も宇宙の中の一員として生きています。これからの未来が希望と夢を与えてくれるよう、私のまわりの宇宙を描いていきたいと思います。

千野 希帆子
（リキテックス賞）新会員

コイ
100S

この度は会員に推挙して頂きまして誠に嬉しく思っております。自分が実際に学生服を着ていた頃から学生服を主題に描くことが多く、長年続けて来たことがこのような形で評価していただけたこと、とても光栄に思います。歳を重ねるに連れ、この主題について日々違った表現を思案する毎日です。それを形にすべく、日々精進してまいります。

辻　智子
（マルオカ賞）

砕石場跡Ⅰ
100F

女流展は今年で三回目ですが思いがけず賞を頂きとても感激しています。「毅然と建つ廃墟」をテーマに作品を描いています。 現在は廃墟でも過去には無くてはならない存在であった建築物。 その頃の輝かしい姿を思い浮かべて頂けたら幸せです。 これからも心と想いを込めて作品を描いていきたいと思います。

特集「絵と共に歩む」

今回は3人の委員の方々に、女流画家協会と共に歩んだ50年の道程を語っていただきます。さて、その画家人生は一体どのようなものだったのでしょうか。

≪女流画家協会と私≫

服部 圭子

第73回展
2019 printemps 100F

1947年女流画家協会創立に携わった先輩の方々が芸術的、生活的に困難な時代、並々ならぬ努力のもと、第1回展を開催し、73年の長い歴史を刻み、今年第74回展を迎えました。

女流画家協会と私の関わりは第22回、第23回展の岡田節子先生事務所のお手伝いをした時です。当時の仕事は全て手書きで入選名簿は鉄筆で原稿を書き、謄写版で刷る大変な作業等、初めての経験も思い出となっています。

第25回展で群像を描き初出品の150号「和」が初入選し、思いがけなく船岡賞を受賞、第1室に陳列されました。嬉しくて夢のような気持ちで何度も足を運んだことが今も甦ってきます。当時の都美術館はヨーロッパを思わせる大きな階段と太い石柱の重厚な建物で、その階段を一段一段上る度に、絵や色々なことを考えさせられた何故か忘れられない記憶があります。

50回記念展は、光栄にも現在の上皇后様が御来場下さり、桜井濱江先生とおふたりでのご様子がTVニュースで放映され、貴重な一日でした。

渡辺由紀子さん、遠藤彰子さんとの54、55回展事務所も各々が内容を理解し、話し合い、毎回cafeをしながらの楽しい2年間でした。

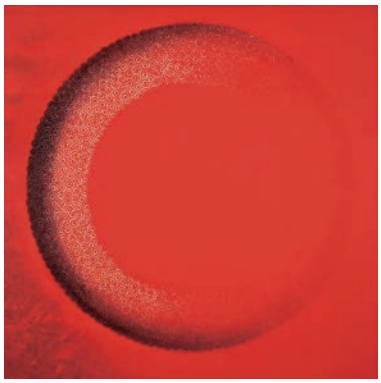
地方展は地元の方たちと委員会員の協力があり、出品者との交流も深まり女流展を広める良い機会で、美術館見学、観光もできて楽しみでした。

「女流展を応援したい。」と第48回展から12年間もえぎ賞とギャラリー神宮苑で委員小品展の企画をして下さった故赤須道子様には感謝の気持ちで一杯です。70数年の女流画家協会を支え続けてきた方達の、志と藝術精神は今後も受け継いでいかなければなりません。これからは若い人達も、新しい風を吹き込んで自由で活気ある発表の場として、華やかで魅力がある女流画家協会の発展を願っています。

時代は昭和、平成、令和と移り私の中で女流画家協会と歩んだ50年の歴史の数々の想いが、今走馬灯の様に懐かしく浮かんできます。

≪私の画家人生≫

渡辺 由紀子



第73回展
Kehai-環-R01　100S

小学生の頃、我が家の前の広場に楠の大樹が見事に葉を繁らせていました。その大木を若い男の人が写生をしていたのです。筆ではなくナイフの様なものでチューブから出した絵具を捏ねては塗り、削り取っては又塗るを繰返し、いくつもの色が重なり混じり合って何とも不思議な描き方だと子供心を魅了されたのです。この時が私の油絵との初めての出会いでした。

両親の都合で東京に移り住む事になり当時画材を渋谷のウエマツ画材店で買っていました。ウエマツの社長さんが同郷という事もあって懇意にして頂き、彼女の紹介で原宿にある澤村美佐子先生のアトリエに通い女流展に出品し始めたのが20代の中頃でした。

澤村先生からは絵画に就いて様々な事を教わり、作品を客観的にみる事を学び、又悩みや疑問をぶつけ人生に就いて話合える家族の様な存在であり、私にとって掛替えのない恩師でした。

あれから半世紀の時が流れ、出逢った頃の先生の年齢を遥かに越える年になり今顧みると女流展の多くの大先輩方や同世代の仲間との出会いによって私の画家人生が培われて来たのだと感慨深く思い感謝です。この年になっても夢中になれる時間がある事は、ほんとうに描き続けて来て良かったとしみじみ思います。

私の画家人生、いつまで続けられるか力まずもうひと踏ん張りしてみようと思うこの頃です。

≪回想ー思い出すこと、いろいろー≫

継岡 リツ

大学を卒業した年から女流展に出しはじめ、その後立軌会の招待出品を経て同人に決まった時に立軌の須田先生に女流を続けていいのですかとおききしました。先生は他流試合も必要だからねと背中を押してくださり、私は女流と公募しない立軌の両方でずっと作品を発表してきました。

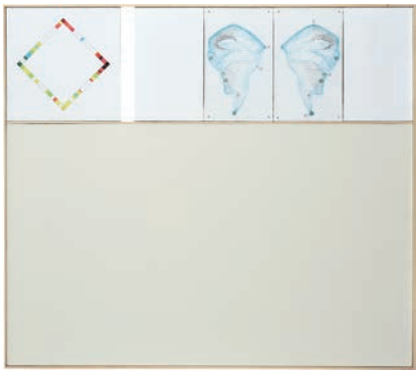
今、どの団体も世代交代で女流も同じ。年表の「記録」の背景にあったいろいろなことを何か伝えられたらと思い書いてみました。

50回の記念展では皇后さまがおみえになるというので2日程前から物々しい警備がはじまり、当日は桜井浜江先生がご案内役をされました。後でおききした話では、都美館の外の排水溝のプレートのすき間に美智子さまのヒールがはさまらないようにカバーがされたとのことでした。

60回の時は都美館と上野の森の2会場で特別展。また久しぶりに海外展としてニューヨークのセイラムギャラリーと、2年後に日本クラブで有志展を開催。セイラムの会期中に入江一子先生が90歳のお誕生日をむかえられ日本クラブ展にもご出品、その翌年その日本クラブで個展をされました。今、いざ自分が80歳になってみると入江先生のバイタリティと現役104歳はすごいことだと実感しています。

同じ北事務所の時に都美館の改修・休館の話があり準備のためにいつもより早く次期事務所が決まり、髙橋和さん、堀岡正子さんと私が担当することになりました。3人で都内と埼玉、神奈川などあっちこっち会場探しをして、広さ・交通の便・借館料・審査スペースなどをリストアップし委員会に諮り、結果64・65回の会場は上野の森、会員と一般は前期と後期に分け、委員は入れかえなしで小品を展示することで落着。同時に改修後の66回展からの会場も上野か六本木かという課題もあり委員全員にアンケートをとって都美館で続けるということが決まり、次の馬越事務所にバトンタッチしたのでした。

他にもいろんなことがありました。今はなつかしい思い出です。



第73回展
特別な時間-psyché-　142.5×162

編集者から　文中では、3人の方それぞれの視点で、女流展とかかわる人生が語られました。歴史的に興味深い出来事と共に、一世代前の先生方の懐かしいお名前も出てきました。共通していたのは、絵を愛する心と弛まぬ努力。今後ますますのご活躍をお祈りいたします。

追悼　高尾みつさん　ご冥福をお祈りいたします。

ー高尾さんの思い出ー

岡田 菊惠

高尾みつ先生が女流展の委員になられてから何年になるのか、1978年に日本女流画家団として訪中した時にすでに委員であった。団長は大住閑子先生だった。広州から入り南は南寧という所まで行き、中国もまだその頃は素朴で楽しい旅の思い出となった。

今回はまさか亡くなるとは思いも寄らぬ事でした。ご親族の事や生家の事、展覧会の事などすべて全力で当たられたのであろうかと思う。私は自己の内に今だに先生の死を感じない状態でいます。

何時も美しいカレンダーを作成され送って下さいました。美しい色彩と構成の厳しさ、センスの良さは高尾さんでした。

長谷川路可という日本にイタリアよりフレスコを紹介された作家と親しく、私の生家の目白の家の近くで町内でもあり知っていました。その事をとても懐かしく喜んでおられた事を思い出します。

静かで声高に話す人ではありませんでした。
長い事女流を有難う。合掌

第72回展
自然回帰「整地」　130F

故 高尾 みつ　画歴

1932年生まれ
1955年　女子美術大学芸術学部洋画科卒
1961年　第15回女流画家協会展　会員推挙
1963年　第17回女流画家協会展　会員努力賞
1968年　第22回女流画家協会展
　　女流画家協会賞 H夫人賞
1978～9年　第32、33回　事務所会計
1994～5年　第48、49回　事務所代表
2019年　10月逝去

女流画家協会研究部

会場：東京都美術館2F 文化棟スタジオ
毎月1回金曜日に実施　※都合により他の曜日になることもあります。

研究会は、都美術館2Fスタジオで8月、12月を除く年10回行われています。裸婦、コスチューム、ダブルポーズなどで、クロッキー3ポーズの中から固定ポーズを決め、鉛筆、パステル、水彩など自由に好きな画材を使って制作しています。参加者の希望になるべく沿った形にし、参加者は会員、出品者、女流には出品していない方、遠方からの方など様々です。又、毎回委員を講師に、部員の持ち寄ったエスキース、作品写真等の講評を行っています。2月には毎年茶話会(軽食、お茶)で意見交換をする場を持ち、交流を深めています。その時に前年度の皆勤賞、精勤賞(年1回欠席)の方には、ささやかな賞品を贈っています。スタジオで輪になって、自己紹介、研究会に対する希望等語っていただき、部員の方たちの声に耳を傾けました。その時に出た希望としてムービングも検討中です。通常は13時30分開始ですが、熱心な方はお弁当持参で、早めに来て、場所を確保している方もいます。委員、会員、出品者の壁を取り払って、自由に意見交換できる場にと心がけています。　(松本)

✿詳しくは女流画家協会ホームページブログでも紹介されています。こちらの記事もご覧ください。

ホームページ

✿皆さまで盛り立ててくださいますようお願い申し上げます。情報提供・お問合せはHP係まで。(中嶋)

協会ホームページ(http://www.joryugakakyokai.com)

協会概要や出品規定、入賞作品画像などを掲載しています。国内だけではなく韓国・中国・台湾・シンガポールなどアジア各国からのアクセスも多く、昨年1年間のPV(ページビュー)数は61,228。そのほとんどは会期前後に集中しています。今年度は、年間を通して多くの方々にアクセスして頂けるよう、新たに2つのページを立ち上げました。

1.委員・会員　個展グループ展情報

最新の展示情報を掲載しています。委員・会員の展覧会場へ足をお運びいただくことで、作家同士の新たな出会いや交流のきっかけとなっています。また、一般の方からも好評をいただいています。

2.女流画家協会ブログ

まだ生まれたてのページです！(スマートフォン対応)
女流画家協会展に関わる多くの作家の皆さまに登場して頂く予定です。まずは研究部の様子、地方在住や初出品の方々の声を中心に発信したいと考えています。

2021　第74回女流画家協会展のお知らせ

会期　5月29日(土) ▶ 6月4日(金)　　東京都美術館

年に一度展覧会を楽しみましょう! 貴女の出品をお待ちしています。

編集後記

Vol.8では、会報をより楽しんでいただくためにページ数を増やしました。コロナウイルスは世界中に拡散。未曽有の事態の中で、絵を描くことが心の癒しと明日への希望に繋がることを祈りつつ。(K)

女流画家協会 会報 Vol.8-2020.5
発 行 日: 2020年5月29日
発　　行: 女流画家協会
編集委員: 金谷ちぐさ、照山ひさ子

女流画家協会 事務所
代表　中村智恵美
〒210-0024
神奈川県川崎市川崎区日進町1-2-307
TEL&FAX: 044-272-5200